

記念日ではない、 日常の中にある幸せを活写

プロデューサー、フォトグラファー 石田直之さん



4年前、スタジオを構え、カジュアルフォトという新しいコンセプトを持ち込み写真業界の注目を浴びたカメラマン。今年も公募数が日本最大規模と言われ、ファッションデザイナー・桂由美さんと写真家・立木義浩さんを審査員に迎えたフォトコンテスト「ウエディングフォトアワード2010」で、プロ部門金賞とベストショット賞をW受賞するなど、周辺を賑わせている。一体その正体とは？

「楽しく毎日を生きていく」人生の目的はシンプルなものだ。自ら定めた人生目的の上をしっかりと歩む。本町商店街でフォトスタジオ「ism」を営むプロデューサー、石田直之さんは「人生の目的は楽しく毎日を生きていくこと」と決めていく。

「生のほとんどの時間を仕事に費やしている。どうせやるなら楽しくやりたい。もたないやん。言葉の上でだけとらえ、アリとキリキリスのキリキリスイメージではない。3年後、今より楽しんでいる。そして10年後、こんなおきたいというのもある」と言い切る姿に、今だけ良ければ、の浮ついた考えは見当たらない。毎日を通す中で、楽しいこともあれば嫌なこともある。物事を円滑に進めるため、時には妥協したり、諦めたりして悩んだりするもの。その経過の中で、目的を見失うことも多々。「例えば、いじめる儲かる話が舞い込んで、楽しいイメージが湧かないとやらない。それに、もし、何が悩んだとき、それは楽しめていない証拠。そんなときも、やめると決めている。フジテレビに講演会の講師として呼ばれるほどの実力派カメラマン、写真業界にカジュアルフォトというトレンドを持ち込んだり手経営者。しかし、その本領は、人生目的を踏み外さないことと決めている。決断力にこそある。「自分だけのことで言うなら、今死んでも悔いはない、というつもりで生きている」。自

信と、そこから生まれる落ち着きに満ちた口調で語る。「お客さんとともに楽しむ。というよりお客さんよりも楽しんでるかも」。その根底には「自分たちが感動したいとお客さんは感動させられない」との思いがある。そんなスタイルに憧れ、大阪や富山から門を叩きに来たスタッフもいる。今だけではなく、人生を通して楽しくあり続ける。また、仕事を本来、楽しくあるべきもの。そのことに全力を注ぐ純粋で強い気持ちだが、スタッフも巻き込んでいく共感力となる。石田さんのスタイルは、不況を不況と感じなくなった世の中を生かすひとつのヒントである。

一念発起した25歳を皮切りに飛躍への道を歩み始める

老舗写真館の3代目と聞けば根っからカメラマンをイメージしただが、継ぐ気は全くなかった。京都の大学を出たら、そのまま就職するつもり。その理由は「オヤジが楽しそうに見えなかった」から。しかし、父・主計かづえさんの病気を機に、大学卒業後、飛郷。カメラの力も知らない素人



家族だからこそ隠し出される幸せいっぱい笑顔を書き取るカジュアルフォト。

は、主計さんに基本から教えられた。だが、仕事ぶりは褒められたものではなく、与えられたことしかない手伝い感覚。時間があればパソコンに精を出し、スタジオにもも昼寝する毎日。そんな石田さんにヤル気の火をつけた発端は、余りにも多い借金を目の当たりにしたこと。「オヤジは病気で、やるしかない」。25歳になっていた。手始めに工事現場の写真需要に目を付け、建設関係や官公庁などを回った。店に新設した写真現像機を活用し、飛び込みと紹介で40社ほどと契約し、か「ネガ取りに行つて、プリントして届けるだけ。結果は出たけど面白くなかった」と浮かな顔。

そこで次に挑戦したが、ウエディングの写真集や「ビス」だ。「もともと婚礼写真がなければ原価を安くできない」との現像機があれば新郎新婦が自立不動で写真に収まる撮り方ではなく、写真に動きをつけ、時にはスタジオを飛び出して屋外で撮影し、二人が優しく微笑みあう幸せの瞬間を写真集として制作。業界からは「そんな素人みたいな写真集」と批判されたが、口コミの評判となり、いつしかウエディングの



カジュアルフォトで生み出した、気軽に立ち寄れる写真館という強みを活かし、道影の撮影にも力を注ぐ。

石田」と呼ばれるまでに。ピーク時は年間300組を数え、10年で1000組以上のカットを撮影。借金も約5年で返済してみた。ウエディングを始めた当初は楽しかった。と写真集当り前になつてきた。質の勝負から価格競争になつてしまったと振り返る。当初の喜びや魅力が、自分も容れられきっている現状の中、新たな方向性を見出した。自分が出張撮影するスタイルから、来店してもらいスタイルへの転換。「再び求められる仕事がない」との心からだった。

「特別な日だけでなく、普段も幸せ」石田さんの思いが写真に写し出される

4年前、一度ウエディングの仕事を手を離し、本町商店街に立ちあげたのが「ism」だ。カフェが雑貨屋かと思える店舗は、「普段着でお来しに行く感で来てもらえる写真館にしたかったから。店内は撮影スタジオに似せた。1階はウエディングのコーディネート、2階はス



「ウエディングフォトアワード2010」で、プロ部門金賞を獲得した作品「小さな結婚式」。家族の仲睦まじさが、周囲の緑や日の光とも絶妙にマッチしている。

スタジオで撮影イメージに合わせて家具などを用意し、「部屋」を作り込むことができる。中庭や和室もあり、婚礼写真や宮参り後の記念写真にも対応。屋外へ飛び出すと、大手前公園や好古園、シロヒバ公園、美術館とロケーションも多彩だ。これらはすべて、カジュアルフォトというコンセプトが基になっている。業界に新风を吹き込んだこの考えは、子どもや家族をキーワードに「記念日ではない、日常の中にある幸せを写真に残そう」との思いが、それは長男が妊娠6カ月、5009で出生し、生死が危うかった体験に起因する。「子どもや家族について考えさせられた」。今は元気に走り回る長男を見て、「歩けることが、物を手に持てること、どれだけ幸せなことなのか、を噛み分れる。もしもしたら明日、一緒にいらなくなるかも」と不安に思う日々は、日常の中にある幸せ多く見つけるきっかけにもなったという。石田さんの気づきは、写真を通してたくさん家族に、日々の中で見落としかちな幸せに気づかせるきっかけもなった。赤ちゃんと高齢者まで、どの表情も希望に満ちた明るさをたたえている。石田さんの思いが、そのまま写し出されたかのようにだ。

「仕上がった写真は結果、それまでの撮影プロセス、体験が思いになり、写真を見ればそのときの情景が蘇るようになしたし、かつ店自体もそういう場所でありたい。カサラのフラインダ1越しに数多くの幸せを見てきた石田さん。これからも数え切れない笑顔に出会っていく。

プロフィール

1972年9月21日生まれ。結婚後、70年の老舗写真館「イダスタジオ」3代目。近年は講演会や講師を務めることも増え、テレビ・雑誌などでも度々取り上げられる。注目のハッピーホールはスポーツ推薦で大学進学したほどの実力を持つ。